

伊集院静

2020. 10. 30

皆さんは、「あなたの好きな作家は誰ですか」と聞かれたら、どなたのお名前を挙げるだろうか。夏目漱石、太宰治、芥川龍之介、川端康成あたりは別として、今の私であれば、「伊集院静」「塩野七生」「五木寛之」あたりになる。たぶん、皆さんとは一致しないのではなかろうか。「塩野七生」を知っている方が少ないと思われる。「五木寛之」とは『青春の門』からのお付き合いとなる。「塩野七生」には古代ローマ時代のことを教えていただいた。歴史から、人物から学ぶということをお教わった。このお二方とは長い付き合いとなる。ここ数年で考えてみると、伊集院静さんとなる。

伊集院静さんのことは、故夏目雅子さんの旦那さんとして認識していた。それが、あるエッセーをきっかけにのめり込んでいくことになる。それが、「トランヴェール」である。東北新幹線に乗ると、車内に置いてある月刊誌である。

私が以前勤めていたところでは、新幹線通勤の方が、毎月「トランヴェール」を届けてくれていた。この中には著名な作家のエッセーが毎月載っている。中でも伊集院静さんのエッセーは秀逸であった。毎月楽しみにするようになっていった。ところが、連載が終了してしまった。1年で筆者が交代したのである。次の角田光代さんもよかったのだが、私にとっては伊集院静さんほどではなかった。今は、沢木耕太郎さんの連載が数年続いている。

伊集院静さんの「トランヴェール」での連載は終わってしまったが、私はあきらめきれずに本屋さんへと向かった。「これだけのすばらしいエッセーだ。きっと単行本になっているにちがいない」私の読みはズバリ当たった。ちゃんと本になっているではないか。それ以来『大人の流儀』をはじめとして、伊集院静さんのエッセー集を次から次へと読んでいった。

そこには、伊集院静さんが住む仙台のことがよく出てくる。なぜ仙台なのか。奥さんが仙台の方だからである。篠ひろ子さんという女優さんを覚えているだろうか。私も知らなかったのであるが、伊集院静さんは、篠ひろ子さんと再婚していたのである。そして、仙台で暮らしている。作品を読んでいると、伊集院家は、仙台市の西側の高台にある大きな一軒家というイメージがわいてくる。

以前、よく仙台に行っていたが、私のイメージする伊集院家の場所があった。そして、そのうち伊集院静さんと篠ひろ子さんに会えるのではないかという勝手な妄想が始まった。

ふとしたことから、妄想は現実へと向かうことになる。「アナザースカイ」の号に出してもらった私の大学時代の友人から、伊集院静夫妻がよく通っている中華料理店を教えてもらったのである。その店の前はよく通っていた。すぐに場所はわかった。中華料理「謝謝シェシェ」というお店である。早速スマホで検索してみると、口コミに伊集院静がよく来るとあるではないか。これは間違いない。

いよいよ、妻と娘を連れて「謝謝シェシェ」に行くことにした。伊集院静さんと篠ひろ子さんがいたらどうしようと勝手にドキドキしながらお店に入った。そんなに事がうまく運ぶはずもなく、お二人はいなかった。ここのメニューがおもしろかった。料理の写真ではなく、絵が描かれてある。そして、いくつかのメニューには、「伊集院さんおすすめの野菜炒め」「元春先生おすすめの〇〇」などとある。もう間違いない。私は、看板メニューの「麻婆チャーハン」、妻は「伊集院さんおすすめの野菜炒め」をオーダーした。

(No. 2 2 5 に続く)